

上島の文芸

水曜会【弓削】

一人居に届く夕餉の栗御飯
紅葉の遅々たる山に人集ふ
山峡の宿の更けゆく紅葉冷
寄す波のリズムを拾ひ浜小春
外からの声の明るき秋日和
朝寒の守宮落ち来し音らしき

亀島 一美
小林 しぐれ
田坂 苑
田坂 美代子
中本 砂恵子
森本 恵子

生名短歌会【生名】

文字を書く腕のしびれをこらえつつ姪れる孫には
げましの文
平凡に今日も暮れゆく秋の夜を歌作らんと指折り
はじむ
九月末一夜の雨に扇風機、クーラーをはなれやす
らぎて寝る
向日葵よりタンポポがいい絮となり吹かれて見知
らぬ世界を探す
ひとり又一人退院の友ら帰りゆく頑張つてよと夫
を促す
釣りに来し小さな蛸達暴れあう頭はどこか手足は
どこに
この春に植え替えせなんだ鉢の木がお別れ言わず

村上 宗子
村上 司
渡辺 スズ子
池本 滝子
浜田 伊勢子
増成 君子

に枯れてしまいいし

むつみ歌会【岩城】

秋祭り果て檀尻の解体をなす若きらの背に汗ひかる
瀬戸の潮清く澄みつつ流れをり大三島橋バスに渡
れば
巡礼終へ戻るしまなみ海道に母の偲ばゆ三日月の
光
友よりの文に添へたる柿の葉の虫に喰はれしあと
面白し
若き頃日本舞踊を手習ひき昨夜の夢に黒田武士舞ふ
伝統を受け継ぎ守る若き等は趣向を凝らし祭盛り
上ぐ

池田 友幸
浪本 綾子
池田 繁雄
森本 和佳
白石 勇
西本 優子

魚島俳歌柳会【魚島】

草河豚の群れて内港住処にし
鷗群れ群れ沖波止に充満す
風強し登り詰めたる雲の峰
やがてくる春待つ並木参詣す
二人ならどこも天国過疎の島
一人でもいいねふるさと情島
祖父祖母にそれぞれが似て孫二人
ゼロ金利無関係なる高齢者
一畝の大根を蒔き雨を待つ
堀り残し藨ころころと土づくり
尖閣も釣魚も領土秋高し
帰り来し浦の祭りの幟揺れ

三上 運
大船 近義
佐伯 真柳
城山 太郎
柳 小福
松原 瑞峰

第1回全国フォト×俳句選手権

《全国公募の部・佳作》

◎キコキコと下校のペダル夜の秋

弓削高等学校 小林 佳博



製造事業者の皆様へ

統計調査にご協力ください

平成22年工業統計調査を12月31日現在で行
います。調査の実施に当たっては、本年12月
から来年1月にかけて調査員がお伺いします。
調査員は、愛媛県知事が任命する地方公務員
で、「調査員証」を必ず身につけていますの
で、ご確認ください。なお、調査票に記入し
ていただいた内容については、統計法に基づ
き秘密が厳守されますので、正確なご記入を
お願いします。

経済産業省・愛媛県・上島町

かみじま歴史探訪

郷土の先輩たちシリーズ⑩

実業家として雄飛 濱根岸太郎

弓削商船高校（現高専）の『六十年史』（略年表）には、昭和六年七月二十四日、「神戸松蔭女学校生徒来校、十日間の水泳の合宿訓練を開始した」とあります。神戸でも名門の女学校が、別船を動員してまで何故、弓削島で？その謎を解き明かすことができるのは、幕末、浜都に誕生した濱根岸太郎です。『弓削町誌』には、次のように記されています。

「文久元年（異説もあります）、下弓削の浜都に生まれ：青雲の志を抱き：帆船に乗り組んで新天地北海道に渡ったのが明治十八年：井上二平商店函館支店（本店は大阪）に店員として勤務：明治三十二年二月、勤務先を辞し、：独立：」その前後の歩みは『新修尾道市史』第六巻の人物編にも紹介されています。

「文久三年九月三日、愛媛県弓削島に生まれる。若くして北海道に渡って、汽船の運航に着目、大正初年、神戸に濱根汽船を創立。第一次大戦に際し、自分の持ち船を修繕する造船所を造りたいとの念願が造船所設立のいきさつである。大正七年、尾道市の対岸向島に地を選び、当時の水野造船所を買収、向島船渠株式会社を設立、矢継早に拡張、中国筋屈指の工場としたが、新設一年にして大正十三年五月二十九日に歿：」

函館時代には、もう立派な実業家であつたらしく、『函館市史』（通説編）には、「明治四十五年、濱根岸太郎の（株式会



濱根 岸太郎

社）函館造船所（資本金一万五千円）」とあります。神戸市でも、初代岸太郎のあとを受けた第二代濱根岸太郎は神戸市立児童ホーム理事長や松蔭女学校理事長等に就任している（『弓削町誌』）。松蔭女学校の浜都での水泳合宿訓練は、松蔭女学校の理事長であった（第二代）濱根岸太郎の斡旋によって実現したに相違ないでしょう。それ以前に、初代の岸太郎は次のように事業を發展させていました。

「汽船のメリットを身をもつて体験し：大正の初年、彼は神戸に進出：何隻かの船をもち運航させてみてはじめて知ったことは、汽船の修理費も侮ることのできない出費であることであつた。そこで彼の考えたことは、自分の船の修理は自分でするに限るということであつた。そこで大正七年、水野船渠を買収して資本金一〇〇万円で向島船渠を設立し、翌八年営業開始。このようにして、社運益々隆盛に、その才腕は高く評価されたが、大正十三年、死期迫るや、嗣子に遺言して、弓削村に対し育英基金二万五〇〇〇円及び海底電信架設費五〇〇〇円を寄付させ、教育の振興ならびに郷土の開発に尽した。村民は、この芳志を永遠に伝えるため、小学校の校庭に頌徳の大石碑を建立した。」（同前）

「濱根岸太郎翁頌徳碑」の碑文（原文は漢文）は次のようです。「寒賤（かんすう）、わびしい田舎に身を起こし、夙に（つとに、早くから）北海の風濤（ふうとう、強い風）と闘い：ついに巨万の富を積み、斯界（しかい、この社会）に雄飛す、而して（しこうして）常に墳墓の地を忘れず：本村育英・交通の経営に資し、一郷の面目翕然（きゅうぜん、和合して）、觀を改む：大正十五年五月、弓削村之を建つ」

二代目の岸太郎は、養子でしたが初代の業績を見事に受け継ぎ、向島船渠も尾道造船所に發展。また、先代に引き続いて、弓削村の發展に尽力しています。

大正十五年十一月 小学校へ（天皇陛下の）御真影の奉安殿（当時の金額で一〇〇〇円）

昭和四年二月 小学校へピアノ一台（三〇〇〇円）

昭和五年 弓削商船学校の機関学科新設の資本金一万円（同校『六十年史』にも記述がります）
昭和十年八月 弓削村名誉村長、同十四年に辞任

九月 小学校へ映写用暗幕装置
昭和十一年四月 公会堂修繕、備品補充
昭和十五年十二月 小学校へ映写機

濱根家の菩提寺の自性寺（臨済宗東福寺派）にも、「大正十二年、本堂の建て替えに当って総費用の半額」を寄進するなど手厚い配慮が残されています。（恵慈現住職談）『尾道造船株式会社50年史』（平成5年、同社刊）の第1章「濱根岸太郎翁一代記」には次のように記されています。

「家が貧しく、そのため岸太郎は石灰の石山で骨身を惜しまず働いて、家計を助けてきた。しかも疲れた体をいとわずに、下弓削の古刹（こさつ、古い寺）として名高い自性寺の第七世堪堂大和尚に師事し：」当時、岸太郎少年は一眼を失明していた。それを乗り越えて生き抜いていったのです（自性寺、恵慈住職談）。

その頃、自性寺は下弓削村ともども石灰山の共有地主でもあり、岸太郎と自性寺の縁はひとかたではなかったのでしょう。こうして育てられた実力が、やがて見事に結実したのではないのでしょうか。



初代濱根岸太郎頌徳碑（弓削小学校）

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授

村上 貢 稿